

村野次郎創刊

香蘭



2021年(令和3年)6月号

第98卷

第6号

通卷1086号

二〇二一年(令和三年)六月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十八卷第六号

風吹きて青葉あかるき夕庭によるこびさやく

あこ
吾子を歩ます

『夕あかり』

大正十二年、村野先生二十九歳の作。

一読して情景が浮かぶ、さわやかな歌である。そして、青葉、あかるき、吾子、歩ますと「あ」の音が連続して心持よくひびく。

年譜によれば、この年の三月一日「香蘭」創刊号が発行され、白秋を顧問に迎えている。

そんなあわただしくも充実した時期の先生は家では長女富美子さまの良き父親だったことが窺える。

この歌の外にも『夕あかり』には十六首もの吾子歌がある。

背景には、妻禰子さまが病を得てお亡くなりになる（大正十三年）という不幸があり、どの歌にも幼くして母を亡くしたわが子をいとおしむ思いと、父親としてのあたたかい眼差が見える。いずれにしても、先生の若き日の父親像がしのばれてとても好きな歌である。

『夕あかり』89頁、『村野次郎三百首』10頁に収録）

四 選 者 の 作 品

へろへろ歩く 平塚 千々和 久幸

浴室に咲ける造花も時折は花散らすなり生きねばならず

海べりのさくらが先に開くこと今年知りたる湘南に春

へろへろと歩み来たるがラオシャンの前には今日も人集りして(ラーメン屋)

飲み食いの銭いくばくか支払い春ちかき街にひと日を遊ぶ

放つとけばいずれコロナは終息す大和島根の無為無策ぞよき

朝刊の死亡記事四人われよりも年嵩三人若きは一人

わがことを除けばわれと同年の男女はじゅうぶんに老耄である

週二回陶芸教室に通いいし病む前の妻の写真出できつ

名さえ残らず 横浜 渡辺 礼比子

散策の途次に立ち寄る緑園に碑のあり予科練誕生地とぞ

植林し杏の里としオープンす横須賀海軍航空隊跡

競争率七十五倍を突破せし予科練一期生誇らしかりけん

十代の子らを悼みて碑に刻む「一機一艦必殺の体当り」

鷗・鳶・鶴鶴今日も飛び来たり若鷺登ちし滑走路の跡

自を「空の御楯」と詠みて散華せし予科練生よ名さえ残らず

散華せし同胞を悼み碑を建てぬへこの地に学んだ生存者一同
花影に英霊の声囁けり 美し国はもまだ来らずや

マスク数枚 鎌倉 香山 静子

一通り仕事を終へてがつちりと凝りたる肩をとんとん叩く

これを書きあれを仕上げたら出掛けんと思へどつまりは腰上げずをり

マスクして歩いて来るのはあの人か先づは頭を下げておかう

数人の覗けるウインドウに並びあるレース模様のマスク数枚

この露地を日々通りゆく人の顔大方知りて会釈を交はす

白々と花を揚ぐる木蓮の木下に平伏すカタバミの群れ

あ、そろそろ花も終りか夕空に白き花弁反らす木蓮

疫病の蔓延してゐる世と言へど私は私と椿は真つ赤

そうかも知れぬ 我孫子 丸山 三枝子

強風に押されて歩く手賀沼に踊る河童を撮さんと来て

沼の面に踊りつづける青河童 雨ニモマケズ風ニモマケズ

太平洋ほどの広さか荒波を泳ぎつづけるオオバン一羽

同じ位置にいるから浮いているだけと脇谷さんが言うそうかも知れぬ

心して江口絹代の春の歌、脇谷房子の鳥の歌読む

切ないかみどりのマガモおりおりは躡を抜けて歩きまわれる

子供らの送りにくれたるメールにてお参りをする彼岸の墓に

浄められ供花と供物に華やけるスマホの墓に合掌をする

作品一特選



(四月号作品から)

渡 辺 礼 比 子 選

ほろり現わる

川 崎 飯 島 智 恵 子

手入れせぬこの荒れ庭の片隅に日本水仙ときくれば咲く

落の葉の根もとをさやる手に触れて固く小さな「ふきのとう」ある
千両の実を食べつくし万両の実に移りゆく鶉の番が

プラスチック製のお供え餅を鉢もてきざみ捨てたり「プラゴミの日」に
プラスチックのお供え餅の中にある胎内仏のような切餅

話半ばで消えてしまった人の名が何時ともなしにほろり現わる
読みつかれ外の面を見れば水雪の何時かあがりて薄陽さしくる
・ 日常の此事を掬いあげ、硬軟自在な表現で詠む。

夕焼けだんだん

習 志 野 石 井 雅 子

さよならは言はない「またね」あきかぜの中でさびしい約束をする
一年を抜かすにおいた葉ボタンの白とピンクの葉が花となる
「下駄鳴らし飲みにゆくのは粹だよ」と下駄屋のおかみに言はれし夫は
白さがハヤを食べる鴨川をテレビでみてゐて 京都にゆけず

遺された眼鏡はわたしに丁度合ふあなたと二人で見えてゐるやうな
「正月は夜勤」と看護師チーちゃんはまだスタジオの床に全開脚して
・ 挽歌を詠むことで、亡き人をかたわらにぐいと引き寄せる。

こう寒くては

川 崎 伊 藤 美 恵 子

リモコンにやんわり消える電灯の奥床しさに今宵はふれる
雨樋に溜まる落葉が窓いっぱい銀色時雨のすだれをかける
かの人のはかかる温とき声持つとライン歌会の音声を知る

第三波来たれば詮なしオルガンのコンサートチケットコロナに貢ぐ
笹山歌会せしはいつの日柴又の川甚コロナで店閉ずという
脱走せし猫を待ちつつ戸を少し開けておかないこう寒くては
うつらうつらしながら見ていた昼のテレビ誰か来たりて消してゆきたり
・ 肩の力の抜けたユーモアが心地よい。想定外の六首目四句に驚嘆した。

友

川 崎 大 井 田 啓 子

ひさびさに受話器より聞く友の声いつに変わらず若やぎてをり
はるばると友の声届けられてゐる受話器しつかりにぎりしめたり
受話器より伝はりてくる友のこゑ猫の死なども話題のうち
犬猫を飼ふこと叶はざりしことに思ひて深く思はず
ふつくらとせる体より優しさが溢れてをりぬ記憶の友は
あて所にあるないと返送されて来し年賀状が一枚ありぬ

・ 篤い友情を描いた一連。四首目下句に心の屈折が巧みに表現された。

少年は風 豊中城 富貴美

天と地の際きはにたなびく初あかね丑年われは謹みて眺む
会へぬなら郵便局に年玉をゆだねむ老いの列に並びぬ
日本が真つ赤に染まりウイルスの感染日毎「最多更新」

「権力は快感」と言ふガースーの支持上がりしがスーと落ちたり
こほるものみな氷りたる早朝の冬眠メダカも凍りてをらむ
スケボーで階段つぎつぎ飛び越えて転びては飛ぶ少年は風

・世相の変化に敏感に反応する。四首目は機知で包んだ為政者批判
月 光 西 宮 鈴 木 桂 子

遠くゐるわれにかはりてわが夫の墓守る兄は花など摘みて
（家族葬にて送りました）またしても知らぬ間の死を知らざるるけふ
りんりんと水仙の白登校の少女らのかはすこゑのすみゆく
陽性者二人出でしと知らされて一瞬しづまる職場にわれら
トランプ氏のやりさうなと誰もが見てゐただらうアメリカの現在
男らが疎林のごとく黙し立つ午前六時の駅のホームに
・三首目のオノマトベ、五首目の風刺、六首目の直喩に納得。

回想と出発と 鎌倉 高島 憲子

新しく雪降り積みよ行く年の地のあまたの傷の上にも
退職の夫とマスクに十三仏巡礼したる夏 忘るまじ
新しき職場に向かふ朝なり夫は小さく「よし」と言ひたり
転職よりひと月経たる夫と見る霜月半ばの上弦の月

消毒液置かるる窓にリハビリの子と眺めをりもみぢ葉の朱
み社の切り竹の肌みどり濃し寒の朝あしたの陽あかざしかへして
祈ること豆を煮ることことことと災禍の冬に吾わがのできること
・清潔な抒情を湛えた一連「カタルシスのある」一首目に注目。

春 画 東京 西野 美智代

謹厳な振りして遺影は繕へど棚の奥より春画出でくる
三千の品を置くとふローソンにコピー二枚をするために居る
お勤めの水素バスにて幕張に晴れて着きしとメールを送る
船堀支部ふなぼりが歌会ひらきし川甚も二百三十年の商ひを閉づ
琴に笙、尺八加はり「ヘイジュード」十一人の緩急に酔ふ
一年余足止めされし恩恵か体重が増え血圧上がる
ハイエナを魅力的とふ岩合氏ゆゑにハイエナの写真が撮れる
・一首目、詠みにくいテーマをとりあげ、人間の本質に迫る。

いのこづち 倉敷 宮原 迪恵

いのこづち衣につけば思い出す一つ年上のままごとの夫
めざむれば白き世界の広がる冬のスイッチ押ししたるは誰
昼の月ぼんやり淡し咲きそむる椿とち十余りだまつて赤い
気がつけばここにいるよと庭隅の小さき椿が紅輝かす
影までもかたづけたるか植木屋の帰りしあとの生木のおい
やとと寡婦の暮しが板に付いてきてつつましく生き年末となる
・どの歌にも必ず一か所チャームポイントがある。

作品二、三特選



(四月号作品から)

丸山 三枝子 選

〈作品二〉

新 春 米子 青山 侑市

家籠もり続ける庭にさざん花の咲けば一隅紅に明るむ
冬空に蝦蟇の形の白き雲大山を覆ひ動くことなし

大根を雪の畑に引き抜けば零るる土は雪に鮮やく

ちびちびと酒酌みながら三が日新年号の「香蘭」を読む

この歳になれば御籤もなからうと人まばらなる神域を去る

・結句を核となして手堅く詠む。二首目の墨絵的な叙景詠に惹かれた。

緊急事態宣言

柏 江口 絹代

柄の緩むメガネをかけてもの書けば明治生まれの祖母に似て来ぬ
娘太り息子も太り正月のライン動画に姿現す

すてばちになりてしまへず 冬霧の中に筑波の山見えくれば

仕出し屋の片山さんは午前二時に鳥より早く起きて働く

青空がしんと静かな金曜日緊急事態宣言だつて

・日々の暮しや時事を詠みつつ、そこに独自の軽妙な詩情を滲ませる。

無観客 長野 長田 庸子

睦び月睦ぶことも儘ならずりモートで交わす年始の挨拶

無観客のニューイヤークンサート手拍子合わす世界に響けと

正月の帰省を窺う孫の声来ると言えず来いとも言えず

千年の銀杏黄葉は一夜さに冬木となりて簡素にすがし

文鎮に並ぶつがいのふくろうに見つめられおり思案の吾は

・一首目は機知に富んだフレーズで入り、納得の時事詠に着地した。

葉擦れの音

横浜 庄司 健造

正月は酒汲むほどに酔うほどに滑舌ゆたかひと日過ぎゆく
新しき年を迎えて日の出づる おのおのもの屋根に照り初む

冬枯れの野にしんと立つ楠の葉擦れの音を仰ぎて聞きぬ

一、二輪ひらき始むる桜花 ゆく人くる人ただしずかなり

カレンダーに歌会の子約何もなくわけのわからぬ赤丸ひとつ

・箇々の素材の質に合わせて、ほどよい抒情性を加味して詠む。

十本の指

さいたま 松沢 みどり

消防車が遠くでサイレン鳴らしてゐるわたしはゆつくり湯舟につかる
手袋をはめるためには十本の指をそれぞれ入れねばならぬ

十本も指があること疎ましく忙しい朝は手袋はめず

残業して帰れば息子が待っている手をつけていない宿題を手に

赤ワインがやけに濃すぎる夜更けなり氷とソーダを足して飲み干す

・日々の憂さを短歌とワインで晴らし、仕事と育児と作歌に励む。

母のけじめ 横浜 三澤 幸子

新しき下着一組用意され母のけじめに年は明けにき
朔つぎと家族だれかの誕生日に赤飯炊きき祖母は無口に

朝の陽にすぎものからゆらゆらと湯気の旗立ち 真つ青だ空
会えばまた個人情報筒抜けの会話弾めり病む身同志は
幼時よりずっと呼び来しヨっちゃんを克つちゃんとする名簿届きて

・前二首の節季への心配りも、後二首のウィットも作者ならではの趣。

〈作品三〉

キャンデーカラー さいたま 丑 山 眞 弓

コロナ禍のおめでたくない新年に「おめでとう」とは言いたくないよ
あたりまえが当たり前ではない事を教えに来たかコロナウイルス
店先のキャンデーカラーの花達の春を呼ぶ歌聞こえてきたり
右往左往の地球を遠く望みつつ満月いつも兎と一緒

・日常の一寸した死角をさびきびと掬い、輪郭鮮やかに仕上げる。

關 牛 鶴ヶ島 大塚 美智子

咲き終えしパンジーの殻にうつすらと霜の降りたり白く煌めく
極月の風のいたずら道ばたの落葉を小犬の足に纏わす

赤白の山茶花散り敷く裏通りへ焚火だたきびだだ児ら歌いゆく
友よりの賀状の版面 關牛にこもる祈りのへコロナを倒せ

・季節の推移を掬い、それを丁寧な詠もうとする意欲が感じられる。

マスクの下で 東 京 中 村 陽 子
赤まんま風にふるえる散歩道話したき母はとなりにいない

マスクしてあとどのくらい過こすのかマスクの下で時間は進む
公園で体操をする人がいて突き上げた手に冬陽のそそぐ
「実」のつく言葉なんだか訝しく忠実・誠実・確実・真実
・二首目と三首目の結句、四首目の「訝しく」は言い得て妙である。

小さき声で 三 鷹 能 城 春 美

ごめんなさい心で叫んだすぐ後のごめんなさいは小さき声で
花舗に並ぶ福寿草の明き黄がムギユツとわれの心を掴む
薄氷うすこの光をゆびで割るときに走る冷たさ嬉しきひとつ
代筆で賀状書くのも八回目母の友の名親しみの増す

・自身の心の在りようをじっくり見つめて詠もう、との試みが窺える。

青き傲慢 行 田 安 田 恵 子

追いゆけばついと逃げゆく翡翠かみたまのその美しき青き傲慢
葦原を鳴らしてあそぶ風の子は秋の野面をころがりてゆく
あの夜に君と食しし桜肉時折われの脳裏を駈ける
菅さんの緊急事態宣言の棒読み 池の面は今日も動かす

・二首目の「風の子」の擬人化は快いが、一首目は力が入りすぎた。

初 梅 鎌 倉 渡 邊 典 子

春さざす指標と呼ばるることなきを初梅ひらく今朝の淑気よ
散りのこる初春はるの紅葉の静しさへ神意のごとし朝光のなか
かへらざる刻々ならん駅伝の若さら相模の海光を蹴る
・三首目の把握に敬服。「淑気」、「神意」はリアリティーが希薄か。

横 須 賀

関口 静子

ふるさとの横須賀をまた訪ねたり若き頃の復習のやうに

盆踊りの合間にいただく赤き水に幼き日々の鮮明に浮かぶ

敗戦後にアメリカ人が買ひくれしアイスキャンデーに子らの行列

デモ隊の安保反対の声聞きながら少女の吾はしろつめ草摘む

小麦粉の香のする横須賀海軍カレーは母のカレーにどこか似てゐる

しぶき上げる軍港めぐりの船の行く傍らに沈む黒き潜水艦

ドブ板のネイビーバーガーに列の出来トランプバーガーは具の溢れをり

わが家のあつた辺りを姉と訪ふ六十年経てあとかたを見る

唯一のデパートだつたさいか屋の潰れ行く見ゆ令和三年

酉の市の拍子木の音耳に残る神社より見上ぐるタワーマンション

人影もまばらな荒崎海岸に黄の岩百合の点々と咲く

ひと言随想

姉と共に

打ち寄せし流木が若布絡ませて三浦の海は何も語らず

長沢の海を望める牧水の歌碑に広がる浜ひるがほは

東西の浦賀を結ぶ渡し舟「愛岩丸」は縁どり朱なり

遠山ちちははに父母ちちはは祀る寺の見えともに住みたる家あの辺り

六十歳も後半となり、姉と幼い頃住んでいた横須賀の汐入というところを訪ねた。「この辺じゃない？ 家があったところ。」「こんなに道が狭かったのね。」「ここで、ピンポンしていたんだわ。」「この神社じゃない？ 盆踊りしたの。」「ここが遅刻坂、ずいぶん急だったのね。」毎日学校まで歩いた道である。

思い出は甦って来るが、不思議と姉と二人で行動した思い出は少ない。

それから、通った小学校、中学校、高校まで歩いて見て来た。そして中学生の頃に、引越しをした衣笠の家までの道を確認した。横須賀は海に囲まれているから、いつかは海にたどり着く。風光明媚である。幼い頃からの二十四年間は鮮明で濃厚である。

とにかく、私の人間形成に深く関わっていることは間違いない。晩年はせめて誰とでも仲良く楽しく健康に過ごしたいものである。

「香蘭」創刊号を読む

千々和 久 幸

『香蘭』創刊号(第壹卷第壹號)は大正十二(1923)年三月一日に発行された。編輯兼発行者田中次郎、発行所は香蘭詩社、東京市外淀橋町角筈九二田中方で、定價一部金四拾錢、郵税金貳錢、毎月一回一日発行でスタートした。表紙はマリ、ロオランサン、裏繪はポール、セシングで本誌は54頁、他に広告が4頁ついている。

村野次郎略年譜(短歌新聞社文庫『樗風集』所収)にはこうある。

大正8年(一九一九)

25歳

早稲田大学商学部卒業。四月、三菱鉱業に入社し、筑豊鉱業所に赴任。十二月、田中家と養子縁組する。

大正10年(一九二二)

27歳

従妹にあたる森田又兵衛(旧名田中徳松)

の三女、輝子と結婚。翌年、長女富美子誕生。大正11年(一九二二) 28歳

中河与一、酒井広治、荒木暢夫、深野庫之介、石野正太郎、池上秋石らと香蘭詩社の創立を計画する。

大正12年(一九二三)

29歳

三月一日、「香蘭」創刊号発行。五月、白秋を顧問に迎える。

この年譜を見れば「香蘭」の発行者が田中次郎であることに納得が行こう。わたしが入会した昭和31年(一九五六)の「香蘭」の編集人は村野次郎、発行人田中次郎であった。

不審に思い村野先生に尋ねたことがあるが、村野家の系譜は親族同士の縁組が二重、三重に絡み外部の人間には解りづらい。

さて創刊号の目次を開くと、巻頭から横山

有策「詩歌三則」、金子薫園「暮色」八首、前田夕暮「樹に物いふ」八首、しんさく「むらの、二らうのうた」、矢島歎「撰津大和八首」八首、岩佐頼太郎の詩「肉體」と寄稿者の作品が並ぶ。このスタイルは「ザムボア」や「地上巡禮」を踏襲したものと思われる。

次いで社友の作品欄には佐野翠披、中河與一、深野庫之介、石野正太郎、池上秋石、柿谷伸、村野次郎等の作品が並ぶ。

村野先生は八面六臂の奮闘で、短歌「冬日爐邊」十二首の他に「歌謡研究(其一)」、「エッセイ「批評と感想」、合評、六號雄記(雑記の誤植?)と大車輪の活躍である。

いったい創刊号はどこから読んでいくか。まず表紙が目に入ることは間違いあるまいが、普通感覚ならまず創刊の意義、目標、作歌理念などから見ていくことになる。だが「香蘭」創刊号には、肝腎の創刊に関わる記述はどこにも見当たらない。

かつてわたしは「香蘭」創刊号を始めて手にした時、そのことを物足りなく思っていたのだが、今度読み返してみても何となく解った気になった。

前回に創刊前後のことに関する証言を紹介

しておいたが、村野先生の「香蘭」創刊の直接的な動機は、何よりもしつかりした作歌の場の確保にあった。それは師北原白秋の直感的で不安定な結社運営に起因する。結社を興しても結社誌は刊行されず、また刊行されても次々と発刊、廃刊を繰り返す師の詩的漂流に門人たちが翻弄されたことであった。

「白秋の詩人的靉強い旋風の前に門人等はいつも木の葉の如く吹き飛ばされていった」という悲哀からの脱出にあった。したがって創刊にあたっても刊行することじたいが第一義で、外に向かつて結社の意義や理念を声高に宣言する必要性が薄かったのであろう。

それに村野先生はもともと歌人としての世俗的な名声や、文学的野心とは縁遠い人である。素封家の次男坊らしく万事に鷹揚で、外部の目などには殆ど無頓着に見えた。若年にして老成願望を思わせる大人の雰囲気があった。これは先生を取り巻く往時の社友の大方の意見でもあった。

そんなことを考え合わせると、創刊号らしい意気込みや華々しさがさほど感じられないことも納得出来るのである。穿った見方をすれば、先生のどこかに自らが結社誌を出すこ

とに「師を差し置いて」とするいささかの遠慮があったとも思える。

余計な註索は措き、創刊の事情を伝える六號雄記（雑記）から読んでいくことにする。タイトル六號は一般に六号記事、六号欄（雑誌などの六号活字で組む記事。雑文・雑報、など埋草的なもの）と呼ばれるもので、結社誌でいう編集後記と思えばいい。実は雑誌で真の先に、そして一番よく読まれるのがこの欄であることは知る人ぞ知るである。

今まで雪に埋れて居た野も山も春の光がさし初めた、枯れて居た草木は青々と芽を出して来る、眠れるものは醒めなければならぬ時である、此時に香蘭は生れたのだ何と云ふよろこばしい事だろう美しく香高き香蘭は我々こころのふる里である、苦しみ多き人間の行路に於て心備きたるものはこのオアシスで其心を醫すがよい、我々は常に暖き友情に圍まれて幸である、このオアシスは何人の所有でもない人の喜びの源であるが故に一個人が獨占すべきものでないからである（後略）

（原文のまま）

春風胎蕩と言うべきか、まこと素朴で率直で牧歌的な雰囲気を感じさせる創刊の挨拶である。創刊号がもつ気概、意気込みまた堅持すべき理念といった殊更なものはないが、言うべきことはちゃんと言っている。

眼目は結社は「オアシス」であり、「一個人が獨占すべきものではない」というところにある。「オアシス」は慰安、憩いの場であり、戦いの場からは遠い。「香蘭」はその出発に於いて「社友が相互に作歌力を競い、相互研鑽する場」という結社の通念はない。

あっさり言えは「作歌の場」より「サロン」として融和、友情」というニュアンスが優先している。謙虚とも周辺への気遣いとも読めるが、このあたりが駆け出しの文学青年とはひと味違う、大人のもの言いである。

また「一個人が獨占すべきものではない」は、今日的に言えば民主的な運営ということである。さらにこの言葉の背後には、宗匠主義や主宰者への個人崇拜の排除が窺える。結社誌をめぐる歌人の離合集散や主宰者の独裁的な運営を見て来た先生の言葉だけに、重みを感じられる。六號雄（雑）記と読み過ごすことの出来ない創刊の決意である。